2016年のテレビとインターネットの動き

倉又 俊夫 ●NHK放送総局デジタルコンテンツセンター

テレビ番組の視聴におけるインターネットの活用が本格化し、2016年には新たな「インターネットテレビ局」などに注目が集まった。ネット視聴を前提とした今後のテレビのあり方が問われる。

テレビのインターネット活用が、いよいよ本格化しつつある。

テレビとインターネットの関係では、2008年以降有料オンデマンド配信が始まり、2014年以降からは無料広告型の番組配信サービスがスタートした。2015年後半からは、民放が合同で立ち上げたTVerというサービスでも無料広告型の番組配信を始めている。10年近くの歳月を経て、テレビ番組の映像が、テレビ局の意図をもって、インターネットに正式に出始めた。2016年は、この大きなトレンドの成長期と捉えることができる。筆者は20年以上前からテレビ局のインターネット活用を行ってきたが、ようやくここまで来たかというのが正直な気持ちである。

以下、2016年の主だった動きから見ていきたい。

■AbemaTVの登場

2016年4月、サイバーエージェントは、テレビ朝日と共同で、AbemaTVという新しい事業を開始した。これは、スマホ用専用アプリ等で視聴できるネット映像サービスで、ニュース、音楽、アニメ、麻雀など約30チャンネル分の番組を24時間いつでも無料で見ることができるものだ。スマホアプリの操作性の良さも手伝い、たちまち評判となった。ユーザーインタフェースの担当者によると、実に250回以上もプロトタイプを作り、現在の形に落ち着いたという。アプリでは横位置にして映像を視聴する。このとき、左右にスワイプすることで、チャンネルを切り替えることができる。非常にスムーズにチャンネルが切り替わることも話題になった。立ち上げ数日後には熊本地震が発生し、AbemaTVでもテレビ朝日のネットワークなどを活用した中継映像が登場した。

AbemaTVは、その後も順調にアプリのダウンロード数を伸ばし、開局から3か月の2016年7月に500万、半年の10月に900万、11月にはついに1000万ダウンロードを達成した。

AbemaTVは、夏以降は、Chromecastに対応し、秋には、AmazonFireTVやAppleTVにも対応した。これにより、さらにテレビとしての環境で視聴が可能になった。

「インターネットテレビ局」という新しい試みが、今後どのように定着していくのか、注目される。

■芥川賞作品『火花』、Netflixで配信

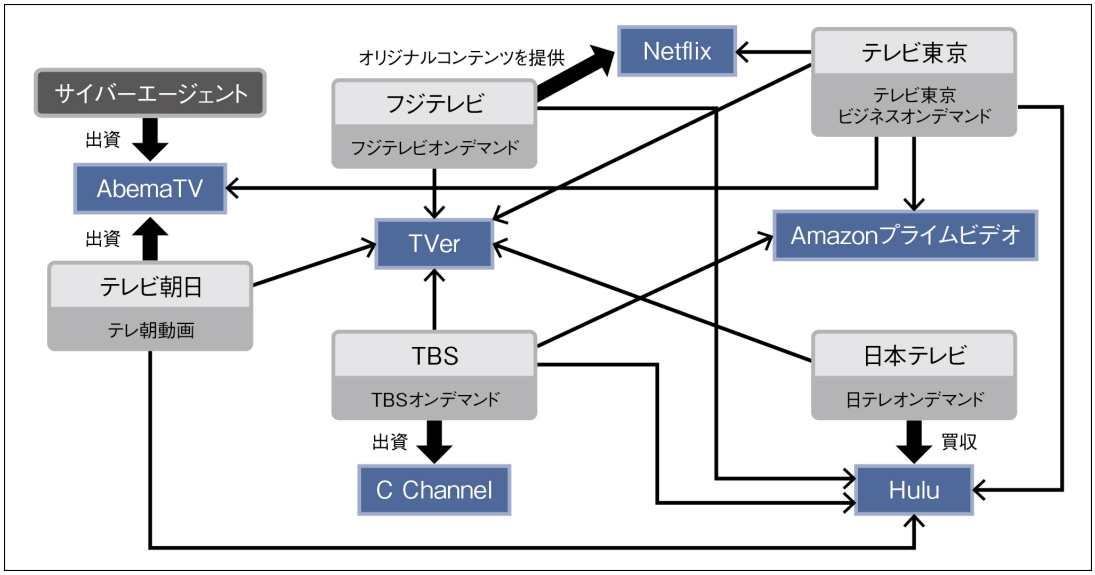
又吉直樹氏の芥川賞受賞作『火花』のドラマ化作品が、2016年6月からNetflixで配信開始となった。芥川賞受賞作品が、世界190か国に展開

インターネット白書／©1996-2017 Impress R&D

する外資系企業によって配信されることは大きな話題となり、また、かなりの数のCMがテレビで放送された。ドラマとしての出来映えについても評価が高く、この作品がNetflixの認知拡大に貢献したことは間違いないだろう。

2015年はSVOD（定額制動画配信サービス）元年と言われたが、2年目となる2016年も引き続きオリジナルコンテンツが作られた。ドキュメンタル（Amazonプライムビデオ）、フジコ（Hulu）などが挙げられる。彼らの努力は今も継続中であり、一部のドラマファンや映画ファンには浸透し始めたが、まだ広く一般の市民権を得ているとまでは言えないのが現状である（資料1-1-3参照）。

資料1-1-3　テレビ局と主な動画配信サービスの関係図



出典：日経ビジネス 2016年9月12日号の記事「特集 テレビ地殻変動 ネットTVが作る新秩序」をもとに筆者作成

■リオ五輪のライブストリーミング

NHKでは、これまで、オリンピックのたびに新しいデジタル施策を積極的に実施してきた。特に、放送で伝えきれない試合については、インターネットによるライブ配信を行ってきた。2010年のバンクーバー冬季五輪から、徐々に配信する試合数を増やしてきたのである。2016年のリオデジャネイロオリンピックでは、ライブストリーミング配信720本、2513時間（最大時29チャンネルで同時ライブ配信）と、過去最大規模となった。

通常、五輪におけるライブストリーミングの音声は、実況のない現場音のみだったが、リオ大会では、ネット用に独自の実況を14本について実施した。また、五輪放送をそのままネットでも同時に提供する試みも行われ、こちらは18回、49時間実施された。このうち、訪問者数が多かった上位3つは「陸上（男子400mリレー決勝ほか）8月20日」、「卓球女子団体　準決勝　8月15日」、「卓球女子団体3位決定戦　8月16日～17日」である。

今大会では、開催地リオと日本の時差が12時間あったため、多くの試合が日本の夜中から明け方に行われた。そのこともあってか、ハイライト動画の人気も高く、期間中393本制作され、総再

インターネット白書／©1996-2017 Impress R&D

生回数は、7929万回に上った。

なお、民放132社が運営するgorin.jpもライブ配信を実施しており、2500時間以上の配信を実施した。オリンピックはネットでも楽しめるという時代が本格的に到来したといえる。今後、ピョンチャン冬季五輪、そして東京オリンピックでも、リオ大会以上のサービスが期待される。

■スポーツライブストリーミング、DAZNの登場

世界のスポーツに特化した新しいライブストリーミングサービス、DAZN（ダ・ゾーン）が2016年8月にスタートした。ダ・ゾーンは英国の動画配信大手パフォーム・グループが運営し、130種類以上のスポーツ、年間6000試合以上というコンテンツをあらゆるデバイスに届ける。ライブはもとより、見逃した試合は「キャッチアップ」機能でオンデマンドでも視聴できるという。

ダ・ゾーンは、12月には、2017年のＪリーグ（J1、J2、J3）の全試合を独占でライブ配信すると発表し、大きな話題となった。今後、さまざまなスポーツの世界でもネットで試合を観る時代が到来するのか、注目される。

■TVerの躍進、500万ダウンロード超

2015年10月にスタートした在京民放5社が運営するキャッチアップ（見逃し）サービスTVerでは、2016年12月に、アプリの累計ダウンロード数が500万に達した。10月には在阪民放2社が新たに加わり、配信コンテンツ数は当初の約50番組から約100番組へと拡充された。秋シーズンには、TBSドラマ「逃げるは恥だが役に立つ」が人気だったことも手伝い、2016年11月度は月間364万ＵＢ（ユニークブラウザー）、動画再生数は月間1201万回再生と、いずれも最高記録を更新したという。TVerの利用デバイス比率は、パソコンの20.48％に対してスマホ・タブレットが79.52％と、圧倒的にモバイル利用が多く、いつでもどこでもテレビ番組を楽しむことが受け入れられたといえよう。

■NHKの放送同時配信

NHKでは、3つの形態での放送同時配信を実施している。1つ目は、スポーツ放送をネットでも同時に提供する形態で、2016年は、前述のようにリオ五輪時に実施された。2つ目は、災害時等における放送同時配信である（資料1-1-4参照）。2016年は18回実施された。

インターネット白書／ ©1996-2017 Impress R&D

資料1-1-4　NHKの災害時等における放送同時提供（2016年分）

	実施日	配信番組
1	2月7日	北朝鮮ミサイル
2	4月14日～18日	平成28年熊本地震関連ニュース
3	4月29日	大分で震度5強
4	5月27日	オバマ大統領広島訪問
5	6月16日	北海度で震度6弱関連ニュース
6	6月24日	英国民投票　EU離脱へ関連ニュース
7	7月10日～11日	参院選2016開票速報、おはよう日本
8	8月8日	天皇陛下お気持ち表明ニュース
9	8月22日	台風9号関連ニュース
10	8月30日	台風10号関連ニュース
11	9月9日	北朝鮮核実験関連ニュース
12	9月19日～20日	台風16号関連ニュース
13	10月21日	鳥取で震度6弱関連ニュース
14	11月9日	アメリカ大統領選
15	11月22日	福島など震度5弱　津波警報
16	12月16日	日ロ首脳会談
17	12月28日	安倍首相真珠湾訪問　関連ニュース
18	12月28日	茨城県で震度6弱関連ニュース

出典：公表資料をもとに筆者作成

そして3つ目が、最大1万人に限定して行われる放送同時配信（試験的提供B）である。2015年には1回目が実施され、2016年には、11月28日から12月18日の3週間、総合テレビとEテレの2つのチャンネルで実施された。2016年は、放送同時配信とともに見逃し配信も行われ、専用アプリを利用することで、利用者は放送中のニュースや朝に放送されたばかりのドラマ等を自由に選択して視聴することができる。2017年1月現在、常時同時配信については、「放送を巡る諸課題に関する検討会」などで議論が進められている。

NHKは、テレビ放送の常時同時配信の制度整備が実現すれば、「開始時においては地上波（「総合テレビ」および「教育テレビ」）を対象とすることを想定して」おり、「各地の放送局が行うテレビ放送を、地域放送番組を含めて常時同時配信することを基本として想定している」。また、時期については、「2020年（平成32年）の東京オリンピックに際してテレビ放送の常時同時配信を実施するため、その前年2019年（平成31年）には本格的なサービスを開始し、段階的に拡充することを想定している」（以上は、「平成28年12月13日　放送を巡る諸課題に関する検討会（第13回）ヒアリング説明資料」より抜粋）。

■モバイル視聴を前提とした番組コンテンツ作りが必須となる

インターネットではこれまでもテレビ番組の話題が取り上げられることが多かったが、肝心のテレビ番組がネットで視聴できないため、せっかくネットで話題になっていても、そこからシームレスに視聴につなげることはほぼ不可能であった。しかし、今回取り上げたさまざまな取り組みによって、ネットで話題になったら、すぐにその話題の番組を見るのが、新しいテレビの視聴形態になるのではないか、と個人的には期待する。

そして、個人的にもう1つ期待するのが、ネットでテレビを当たり前のように見られるようになったときに、それを前提とした新しい番組はどういうものになるのか、という点である。番組配

インターネット白書／ ©1996-2017 Impress R&D

信を第1段ロケット、常時同時配信を第2段ロケットと位置づければ、第3段ロケットは、ネット配信を前提とした新しい番組づくりとなる。もっといえば、テレビの再定義こそが、21世紀のテレビのあり方を決定づけると筆者は信じている。

そのためには、さまざまな試行錯誤が欠かせない。たとえば、尺（番組の長さ）ひとつを取っても、現在のように30分番組や60分番組といった形でよいのか、トライアルが必要だろう。スマホ視聴がますます拡大したとき、10分以上の番組をスマホで見続けることが快適で理にかなっているのか、という検証も必要である。

2016年10月には、米国通信大手のAT&TがCNNやHBO、ワーナーブラザースを擁するタイムワーナーを買収するというニュースが飛び込んできた。買収総額約854億ドルというこの買収は、いわば通信インフラと一流コンテンツ制作集団の合体であり、目が離せない。というのも、買収の発表時には、「映像の未来はモバイルであり、モバイルの未来は映像にある」と謳っているからだ。

iPhoneの発売から2017年で10年となる。スマホは爆発的に普及し、いつでもどこでも手元にある端末の威力が、テレビの世界をも動かし始めている。これまでテレビは基本的には家で楽しむものだった。それがいつでもどこでも持ち出せて見られる今、どのような中身（コンテンツ）が求められるのか。いよいよ、テレビの真価が問われる時代になったといえよう。

インターネット白書／ ©1996-2017 Impress R&D

Internet White Paper ARCHIVES
インターネット白書
ARCHIVES
1996,1997,1998,1999,2000....

［インターネット白書ARCHIVES］ご利用上の注意

このファイルは、株式会社インプレスR&Dが1996年～2017年までに発行したインターネットの年鑑『インターネット白書』の誌面をPDF化し、「インターネット白書ARCHIVES」として以下のウェブサイトで公開しているものです。

https://IWParchives.jp/

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

●記載されている内容（技術解説、データ、URL、名称など）は発行当時のものです。

●収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者（執筆者、写真・図の作成者、編集部など）が保持しています。

●著作者から許諾が得られなかった著作物は掲載されていない場合があります。

●このファイルの内容を改変したり、商用目的として再利用したりすることはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。

●収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用される際は、出典として媒体名および年号、該当ページ番号、発行元（株式会社インプレスR&D）などの情報をご明記ください。

●オリジナルの発行時点では、株式会社インプレスR&D（初期は株式会社インプレス）と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接的および間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

お問い合わせ先 | 株式会社インプレスR&D | ✉ iwp-info@impress.co.jp

©1996-2017 Impress R&D